**乃木希典**

**－軍人として、人間として－**

**3年　西野耕平**

**1.初めに**

「乃木希典」という名を聞いたとき、どのようなイメージがあるでしょうか。

私の中では、彼は日露戦争で二〇三高地を奪取した英雄であり、ただ単に一介の軍人に過ぎませんでした。しかし、様々な本を読み、軍人乃木希典の評価、人間としての乃木希典の側面を知ることで、自らが抱く乃木希典像を見直しが必要であると感じ、乃木希典という人間の評価が大きく分かれていることに着目し、参考文献をもとに、様々な人の「乃木希典」の評価から、自分なりの「乃木希典」像を考える。また、エピソードの中からその人間像を考察し、そこからも考察を広げてゆく。

**2.「人間」乃木希典について**

若かりし時分は、浴びるように酒を飲み、泥酔して帰宅することが頻繁にあり、仲間からは「ハイカラさん」といわれるような派手好きの人であったが、川上操六と共に派遣されたドイツ留学から帰国して以降、「乃木式」といわれるような自らの精神を律し、病的までに実用的、質実剛健な生活を送るようになった。例を挙げると、夜、床に就く時も軍服を着用して寝る、日頃から戦時中のような生活を送るなど、自らを厳しく律していた。このことは、田中義一(当時第三連隊連隊長)が総理大臣になってからの回顧談中で明かしている。

明治天皇の御崩御と共に自決した。日露戦争時において乃木は子息を無くし、多くの犠牲者を出したことから、責任を取るために切腹を申し出ていたが、明治天皇から制止され、子供を無くした分、自分の子供だと思って育てるようにと学習院の院長を命ぜられた。その際「自分が死ぬまで死ぬことはまかりならん」と言われた通り、明治天皇崩御に合わせ殉死したとされる。殉死に際し残された遺書には、明治天皇に対する殉死であること、さらに西南戦争時に軍旗を薩軍に奪われたことを心に恥じ、自決するといった旨の文章が残されていた。この事は当時の日本人ならびに世界中の人間に衝撃を与えた。世の中は近代化が進み、殉死という概念などは遠く忘れ去られた存在となっていたのにも関わらず、自らの精神を死を持って体現したことに人々は衝撃を受けた。しかもその殉死の理由に35年も前に軍旗を奪われた事を挙げているという点が当時の人々にはショッキングなできごとであった。

「人間としての乃木さんは淋しく暗いものだった」(元部下、作家　櫻井忠温)

→あるべき軍人の徳目という理念をそのまま生身の人間において実現するという乃木の努力はまさしく非人間的なものであった。あらゆる世俗的欲望を絶ち、生活を切り詰め、稗飯を食い、親子の情すら私情として廃する乃木の禁欲は、求道者のものであって、常人ができるものではない。

乃木は立派な人であろうとした。

軍人として無能といわれた彼は、有徳な人格者であろうとした。乃木は自分を何かの為に死ぬことが出来る何者かに作り上げようとした。死処に赴かしめる徳目の権化になろうとした。故にこそ、明治の人々は、特に庶民は「無能」な乃木を崇め、愛した。

「乃木は常に制服を着用していた。乃木にとって制服を着ることは、自身の徳義を常に閲されているということであった。常住坐臥、徳義の塊であることを強いられていたのである。

また乃木は写真が好きであった。なぜかと考えれば、自らの徳義を目に見える形で残そうとしたと考えていいのではないか。」(『乃木希典』福田和也)

**3.軍人・乃木希典について**

明治三十六年の読売新聞…明治の人物千人の短評

「鉄砲玉の怖くない人、部下を愛する人、清廉潔白の人、古名将の風格のある人、日露開戦せば真先に引っ張り出したき人なり」

軍人としての彼の評価は未だ定まることがない。日露戦争中最大最悪の激戦といわれる旅順要塞攻略戦において６万人もの死傷者を出しながらも勝利し、最大の功労者と評価され、さらにその後の水師営の会見において敵将ステッセルに対する乃木の紳士的、相手を辱しめることのない姿勢は乃木将軍を神格化するとともに全世界に「乃木」の名を知らしめ、日本人の地位向上に大きく貢献したとされています。

しかし、この一方で、司馬遼太郎は「坂の上の雲」では、「無策のままに数万の人命を浪費した愚将」、「殉死」では「軍人ならざる詩人乃木」、また「要塞」では「乃木希典は軍事技術者としてはほとんど無能に近かったとはいえ、詩人としては第一級の才能に恵まれていた」などとかなり厳しい評価を下しています。

この司馬遼太郎氏の考えに対し、別宮暖朗氏は著書「旅順攻防戦の真実～乃木司令部は無能ではなかった～」の中で、この司馬氏の視点に最大のヒントを与えたであろう物は、谷寿夫著の「機密日露戦史」であろうと指摘している。この本は当時陸大の兵学教官であった谷が、旅順における最功労者を児玉源太郎とし、乃木司令部の能力の疑問性を定義しています。

また、「坂の上の雲」や「殉死」などといった乃木希典を無能と決めつける考え方を、第一次世界大戦時などのその他の要塞攻略戦の実例を挙げ、乃木の戦術などは決して間違っていなかったとしています。

また、福田和也氏も著書「乃木希典」のなかで「第一次世界大戦の事例を見るといずれの要塞も乃木式の消耗戦を強いる肉弾攻撃を経ずには陥落しておらず、砲撃のみで降参に至った例はない。その点で、乃木の基本戦略は間違っていなかった」としている。

さらに、レーニンも乃木の人物評価を試みています。(『レーニン全集第三十三巻』)

レーニンはこの中で、旅順攻撃における乃木の戦術転換(突撃戦術→塹壕戦採用による包囲殲滅攻撃)を優れたものと認めている。だがしかし、この塹壕戦の採用によって味方の損害を敵と同程度まで減少させることはできたのだが、戦線が膠着状態になってしまった。

乃木は自身の無能を感じていたのか、ということですが、戦後東京に凱旋した際、そのまま参内して復命書を奉読したが、他の将校が正装で参内、奉読する中、乃木は戦場で着ていた軍服のまま明治帝の前に立ち、復命書を読む間、嗚咽してしばしば詰まり、最終的には絶句落涙してしまったといいます。その復命書の内容は、自らが指揮した兵達を「忠勇義烈」と讃えながら、その「忠勇義烈」をもってして百五十余日、六万人の血を流すに向かわせた自らの指揮を「遺憾」と天皇の前で述べている。

この点から考えると、乃木は自らの軍事的無能を悟っていたのではないかと考えられる。

**4.エピソードから**

　乃木希典は学習院院長だったこともあり、裕仁親王(昭和天皇)の教育を承っていた。昭和天皇は乃木のことを非常によく思いになられ一臣下に過ぎない乃木のことを「院長閣下」と呼んでいた。乃木も裕仁親王には一身を捧げるように厳しく教育をした。殉死の数日前には、乃木は親王に自ら写本した山鹿素行の『中朝事実』と『中興鑑言』を渡し、この本がいかに素晴らしいかを説き、涙を流しながら読むように勧めた。当時10歳の親王は、乃木のただならぬ気配に、これは遺言だと気付き、思わず「閣下はどこかに行ってしまわれるのですか？」と聞いたという。昭和天皇は後々まで、乃木の教えや逸話を記者会見で紹介した。その中には雨の日に馬車で通学していた裕仁親王に対し「雨の日にも馬車を使わず合羽を被り徒歩で通学しなさい」という乃木の質実剛健の教えをお受けになったという逸話を好んでされたという。

熊本鎮台歩兵第十四連隊(小倉)の連隊長に任命された二年後に西南戦争が起こり、熊本へ南下したが薩軍と遭遇、激戦となった。そして、軍旗を奪われた。翌日戦って退却し、六日目には左足を負傷した。乃木の自責の念は凄まじく、野戦病院から脱走し戦線に復帰した。しかし、薩軍が退却したのちも自責の念は絶えず、参謀の身でありながら城内から行方不明となり、失踪から三日目に山王山の山奥で断食しているところを発見された。この事件は乃木の陸軍内での評判を大いに上昇させた。しかし、それだけでなく、乃木の歴史にとって重要でもあった。

「この事件以前はごく普通の快活な、人並み以上に派手好みの軍人であったにすぎなかったが、これ以降、明らかに変化した。面貌に陰鬱さが加わり酒を飲むと必ず荒れ、常に何か痛刻を宿している様子の人間になった。」(『殉死』司馬遼太郎)

また、乃木の元に、彼が知らない人から、お金を無心する内容の手紙が届いた。乃木は何も言わずにお金を送ったという旨のエピソードが多く存在します。もちろんその中には虚構も存在しますが、実話も多く存在します。中でも有名なのは「乃木大将と辻占売少年」というものである。これは実話であり、内容は明治24年、用務で訪れた金沢の街角で辻占いをして一家の家計を支えている少年・今越清三郎に乃木が出合い、事情を知った乃木が大金を与え、それに感激した少年が努力を重ね、立身するという話である。この話を聞いた人力車の車夫が美談として新聞社へ投稿したのがきっかけで全国へ広まりました。この後、清三郎少年は金箔業の世界で大成し、1965年には滋賀県の無形文化財に指定されています。乃木は貧窮者、戦傷者、その遺族には援助を惜しまなかったし、そういう人物だとみなされていた。限りなく優しい人物だと思われていた。

　さらに、田舎の駅に、よれよれの和服を着た老人がやってくる。老人は駅前の店で、何某という家を知らないかと聞く。店のばあさんは「知ってるよ」といい、老人は暮らしぶりを訪ねる。「一人息子が戦死してからは食うものも食えずに過ごしている」

老人の顔が曇り始める。さらに「乃木とかいうやつに殺されたんだ、と言って、恨み言の一つも言ってやりたい、と毎日ぼやいてるよ。」ついに老人は泣き出した。そして泣いたままとぼとぼと教えられた家への道を歩いて行った…そして後日その老人が乃木将軍だとわかるという話がある。この話はもちろん虚構であるが、庶民の中の乃木像というものはこういったものであったということが想像できる。

**5.考察**

　ここまでの乃木の人間的側面、また軍人としての評価、さらにエピソードから乃木希典という人物を再び自分の中で再構築してゆこうと思う。

まず、人間的側面を見ると、長じるまで頼るもの、信じるべきものを持っていなかった為に、軍旗事件時も失敗を機に自殺を考え、大酒をし、暴れていたりしたが、ドイツ留学を機にストイシズムをその精神の支柱とし、自らを徳の権化とすることによって、自らを律し、さらに自らの意思、決意を他に知らしめようとしていたのではないかと思います。「これはこうあるべき、いや、こうでなくてはいけない」という自らの中の規範に絶対的に基づいて行動していることから、自己中心的要素を持ち、さらにその自己に陶酔してしまっている、ある程度ナルシストではないかと僕は思いました。芥川龍之介は「偏執狂者(モノマニヤ)」と彼を表現しています。

軍人乃木は、当時としては、旅順クラスの要塞攻略には必要だったであろう犠牲を払い、攻略したものの、旅順安易陥落説を念頭に置いていた司令部など、もしくはその後の小説家や作家などによって、軍事的無能を押し付けられてしまった。当時の戦場を知らない私たちに、その軍事的能力を判別する術はないが、乃木は軍人として非才ではあったが、非凡であったのではないか。

しかし、偏狂者と言われ、当時は軍神と崇められ、一方では五万人の死傷者、150日の日々を費やした軍事的無能者と言われながらも、このように庶民に愛され、親しまれるのは何故であろうか。直接お会いすることはできないが、エピソードの中の乃木希典は、悲壮感と滑稽さを持った可笑しみのある親しみやすい人間に思えるのは僕だけではないだろう。

「尊いから命を懸けるのではなく、命を懸けることで、尊いものにしたのである」

参考・引用文献一覧

・福田和也『乃木希典』(文春文庫、2007)

・司馬遼太郎『殉死』(文春文庫、1978)

・戸川幸夫『乃木希典』(人物文庫、2000)

・別宮暖朗『旅順攻防戦の真実』(PHP文庫、2006)